

『問奇一覽』ノート——韻図の声母について

浦 山 あ ゆ み

はじめに

小稿では『問奇一覽』(1690年)の「切韻捷法」に含まれる「四声経緯転音経緯図」の音系解析を試みたいと思う^①。この「切韻捷法」および「四声経緯転音経緯図」は、『度曲須知』所収の「経緯図説」(ならびに同名の「四声経緯転音経緯図」)の影響を受けたものと考えられる。これから検討する『問奇一覽』の「四声経緯転音経緯図」は合計五枚であるが、このうち四枚を「四声経緯図」、一枚を「転音経緯図」と称する。「転音経緯図」は『度曲須知』所収図を『問奇一覽』の形式に変えて転載したにすぎず、所収字は『度曲須知』に収められる「転音経緯図」と大体同じである。けれども「四声経緯図」の方は、所収文字が『問奇一覽』と『度曲須知』ではいささか異なっている。その相異なる部分こそ、『問奇一覽』の著者である李宗孔がなんらかの意図をもって変えたものと考えられ、そこに『問奇一覽』独自の特徴を見いだすことができるのではないかと思うのである。

今回は、とくに『問奇一覽』に見られる声母を取り挙げ検討することとしたが、その声母を代表する文字は、『問奇一覽』の韻図では二十三字存在するにすぎない。これは『度曲須知』所収の「四声経緯転音経緯図」の三十六字母からみれば、思い切った削減といえる。しかし、韻図の歴史的変遷という視点より考えてみると、中古音以降^②、声母・韻母ともに時代が降るにつれ簡化される傾向にあり、明末清初のこのころには、むしろ二十三の声母の方が言語の実際に、より近かったのではないかと考えられる。たとえば、蘭茂の『韻略易通』(1442年序)や畢拱辰『韻略匯通』(1642年)では「早梅詩」二十字によって声母を代表させているし、閩南語の韻書『渡江書』(1716年以降)では十五の声母となっているのである。したがって、『問奇一覽』韻図

の音系を明らかにすることにより、あるいはその当時の語音や方言の実際の状況を窺えるのではないと思われる。

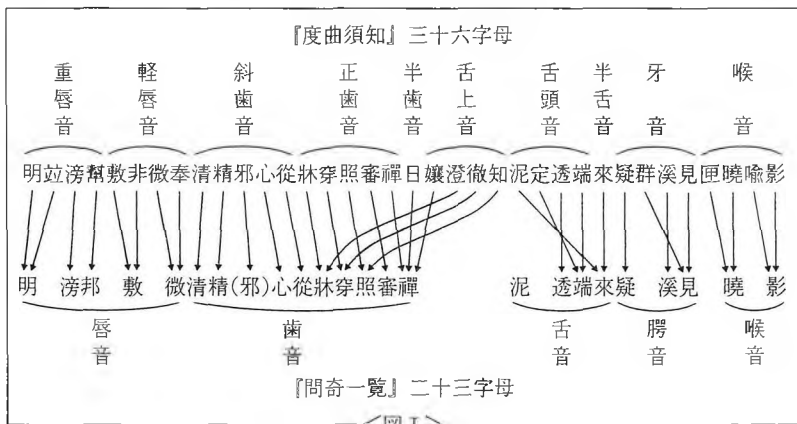
以上のような理由から、『問奇一覽』所収の「四声経緯図」の音系を分析してみたいと思う。紙幅の関係上、小稿では声母のみを扱うこととする。対象となる文字は平上去入四枚の韻図所載の文字——平声568, 上声455, 去声514, 入声238——合計1885字である。

1. 二十三字母について

上述のごとく、『問奇一覽』ではいわゆる三十六字母を減じ、二十三字母の韻図を掲げている。三十六字母より二十三字母に減じた経緯について、『問奇一覽』「切韻捷法」では次のように述べている。

上列曉匣見溪等字，名曰字母，即邵子所著而刪其重複者也。蓋邵子字母三十六内，知照，徹穿，澄牀，孃禪，非敷，奉微，曉匣，影喻，日孃，見羣，端定，竝明，泥來，相類相通，刪去一十三字，僅存二十三字，而衆韻無遺，萬音盡括，更爲扼要。又邵子以三十六母，分爲牙齒舌唇喉，試問齒與牙何別，且次序亦紊，今正以喉腭舌齒唇。自下而上，一氣天然，嬰兒出胎，嗚哇一聲，即是萬音之根，自此一聲，橫開直放，遂無不通之音矣。

この記載をそのままに理解するならば、知照，徹穿，澄牀，孃禪，非敷，奉微，曉匣，影喻，見羣，端定，竝明，泥來の声母については「相類相通」で



〈図 I〉

あるため、それぞれ「其の重複せし者を刪」って、韻図の中の照・穿・牀・禪・敷・微・曉・影・見・端・明・來にした、と考えられるであろう。日孃についても、双方を禪母で代表させたと解釈することができる。「切韻捷法」の記述を図式化すると図Ⅰになる。

ところが、上の記述に反して、実際の『問奇一覽』韻図の中には泥・來の両方の声母が存在している。また、邪母について「切韻捷法」では何も言及されていないが、実際には韻図の中では邪母が削除されているのである。さらに、全濁音の羣・定がそれぞれ対応する全清音声母（見・端）に帰属されるのに対し、唇音の竝母のみ邦母ではなく明母と「相類相通」であるのは異例の扱いといえるが、実際の韻図の中では竝母字の大半は全清音の邦母の欄に収められている。『度曲須知』で孃母とされる文字についても、『問奇一覽』では記述にある禪・日母ではなく、泥母に混入されている文字の方が多いのである。つまり、上の記述と韻図とでは多々くいちがいが見られ、記述を鵜呑みにするわけにはいかないのである。したがって声母の実際の合併状況を検証し、『問奇一覽』韻図の声母の特徴について考察していきたいと思う。

ここで注意しなければならないのが、「刪其重複者」と「相類相通」の意味するところである。それらを同音化と解することもできるし、韻図という限られた枠の制約がある以上、その声母を有する文字の数が少ないために、別の欄に帰属させることがありうる。あるいは相補分布を示す音は同じ声母の欄に収めることも想定されるであろう。このことを念頭におきつつ、『問奇一覽』所収韻図の声母の順序にしたがい、検討していくこととする。

2. 喉 音

2.1 影 母

影母はいわゆるゼロ声母と考えられ、「切韻捷法」では、喻母と「相類相通」である。影母の欄に「王」「爲」「雲」「袁」など中古音喻三母の文字と、「延」「淫」「野」といった喻四母字の両方が収められており、これらについては李氏の記述となら矛盾するところがない。現代諸方言の状況から判断するに、当時においても中古影母と喻母の同音化は十分にあり得ることであり、必ずしもここで特別にとりあげるほどの現象ではない。問題は影母の欄

に、影・喻以外の声母の文字が見られることである。

まず目に付く文字は、影母欄に収められる疑母字「瓦・雅・外・玩・訝・玉」の6文字である。いまの標準語でもたいていの疑母字は影母字と合流しており、とくに問題はなさそうにも見える。しかし、『問奇一覽』韻図では影母とは別に疑母の欄が設けられており、また『度曲須知』韻図ではこれらは疑母字とされている。したがって、これら6文字は『問奇一覽』韻図の作者が意図的に影母に入れたと想定され、その作者の念頭にある言語では、疑母は独立して存在するものの、中古疑母字の一部については、影母（あるいは喻母）と合流していたと考えられるのである。ちなみに『中原音韻』でもこれら6文字はすでにゼロ声母である。

次に、影母の欄に収められる中古匣母字、「奚・桓・豪・何・行・横・涵・禾・莞・緩・恨・混・翰・患・現・號・賀・厚・撼・陷・覈・或・活・合・滑・協」の26文字について検討する。『中原音韻』ではこの26字はすべて影母字と区別されており、いまの標準語でもこれらは [x]、あるいはそれより変化した[ɣ]という音となり、ゼロ声母ではない。また、『問奇一覽』における匣母は、李氏の記述によれば曉母と「相類相通」とされ、影母とは区別されることになっているのである。しかしながら、『問奇一覽』で影母の欄に入れられた26字すべてを例外とみなすには、あまりにもその字数が多いように思われる。おそらく『問奇一覽』韻図作者の念頭にある音系では、これら26字は影母（または「相類相通」である喻母）に同音もしくは近い音であると認識されたのであろう。

上記26字のうち、「奚」は『音韻須知』では小韻字「兮，弦雞切」のもとに列記され、また「畦，弦雞切」と同音でもある。古屋1982によると、『吳音奇字』に「畦，音移」（畦は匣四，移は喻四）とあり、当時の呉語の音では「兮＝畦＝移」（[ɦi]）となる⁷¹。つまり、呉方言で考えれば、「奚」は喻母字と同音となるのである。同じ匣四の「現」「協」も同様に考えられる。四等以外の匣母字においても、少し時代は降るが、たとえば「胡」字（一等）が日本文政九年（1826年）に「いろは」のウ注音に当てられていることが挙げられる。官話音では「胡」がウに当てられることに違和感が残るが、南方の音（呉語と粵語）で考えればふさわしい文字なのである。また、呉語では「緩」（[uəŋ]）や「黄」（[uaŋ]）のように中古匣母字がゼロ声母となる文

字もあり、このために、この二字は影母欄に収められたとも考えられる。一部の方言（湖南）において見られるように、これら26字に限らず、匣・喻母とも声母が脱落してゼロ声母となっていた可能性も否定できない。

2・2 曉 母

「切韻捷法」によれば曉母は匣母と「相類相通」である。曉母欄に中古匣母字は10例見られる（黄・鞞・寒・酣・蟹・滄・関・倅・鬣・畫）。ここに見られる匣母字と影母欄に収められる匣母字には明確な違いは見受けられない。

曉母欄にあらわれる影母字としては「惋」の1例があるのみである。『度曲須知』韻図でもこの字は影母であり、また、現代の諸方言をみてもこの字が [x] もしくはそれに近い声母を持つ方言は見あたらない。

そのほか、見母字として「臬」「懈」の2例、溪母字として「糗」の1例が見られる。これら3字のうち「懈」は『度曲須知』では曉母とされており、『中原音韻』でもすでに [x] であり、とくに問題はない。「糗」は『問奇一覽』去声図に収められており、『度曲須知』では「鯨」（曉母）である。『度曲須知』の方が正しい文字であろう。

3. 腭 音

3・1 見 母

見母欄に収められた文字を見る限りでは、近世北方音に見られる palatalization を窺わせるような現象は見られず、おそらく [k] であると想定される。『問奇一覽』『切韻捷法』の記載によれば、見母と羣母が「相類相通」であるが、実際には見母欄に収められる羣母字は「窘」しかなく、わずか1例から羣母の清音化を判断するのは危険であろう。さらに、後に述べるように、羣母字はしばしば疑母欄に収められ、むしろ数の上からいえばそちらに入れられた文字の方が圧倒的に多いのである。羣母については疑母のところでも再度ふれることとして、ここでは見母欄に収められる羣母以外の声母を検討する。

曉母の字として「詞」一字がある。あるいは「炯」の誤りかとも考えられるが、「詞」は去声図の中に収められており、「炯」（上声）では声調があわ

ない。この文字は『度曲須知』には見られないため、未詳である。また、來母の「檢」も見え、韻図を見る限り手へんであるが、これは誤刻と思われ、『度曲須知』にも収められる「檢」が正しい。中古明母では「攢」が見られるが、この文字が見母欄に収められるのは明らかにおかしい。韻目をみれば真文韻となっていることから推して、『度曲須知』にあるように「攢（搨）」字の誤りである。

3・2 溪 母

ここでも中古溪母以外の文字を検討する。

溪母欄に収められる羣母は「強（上声）・困・割」の3字である。端母字では「湛」があるが、「堪」（溪母）の誤りと思われる。ほかに、穿二母の「闕」字（『度曲須知』では徹母）が溪母として扱われるのは、あるいは尖団の合流を唆唆するものかもしれないが、1例だけでは説得性に乏しい。

3・3 疑 母

疑母欄に収められる中古羣母字は実に30もの数にのぼる。この現象は平上去入いずれの韻図にも見られる。このうち羣母字「強」は平声図では疑母欄に、上声図では溪母欄に収められる点が注目される¹⁴。現在の北方音では「強」は平上どちらも [tʃ] 声母に発音されるが、南方では区別される地方が多い。とりわけ呉語では、平声の方は濁音を残したままであり、一方上声の方は無声有気音に発音される。『問奇一覽』でも全濁音羣母は保存されていた可能性があり、そしてそのほとんどが疑母欄に合併されるが、一部の文字が個別的に見（もしくは溪）母欄に収められていると思われるのである。

疑母欄に見られる泥母字は「濃・鮎・紐・鯁・捏・溺」の6例である。「濃」は『度曲須知』には見えず、『問奇一覽』であらたに入れられたのであろう。現代北京音では「農」と同音となるが、『問奇一覽』では「農」は泥母欄に見られるため、両者は区別されていた可能性がある。「鮎」字は、現在のほとんどの方言で「年」と同じ声母を有するが、『問奇一覽』では「鮎」（疑母）と「年」（泥母）が区別されたと思われる。この二字は『度曲須知』でも区別されており、やはり異なった声母と認識されていたものと考えられる¹⁵。

このほか見母字「崑・勁・咽」も見られるが、「崑」は『度曲須知』から「眞」（疑母）の誤りとわかる。

4. 舌 音

4・1 來 母

來母は比較的安定しており、他の声母と混ずることはほとんどない。ただ日母の文字の「二・爾」が2例のみここに見える。これは來母欄に収めることによって儿化した音を示すと考えられ、あとでもふれるように他の日母字は禪母と合併される。

4・2 端 母

端母欄に見られる中古定母は実に39例にのぼり、平上去入の韻図すべてにあらわれる。この点においては、『問奇一覽』「切韻捷法」の記載とおりであり、端と定の両声母は「相類相通」であるために合併されたことに疑いを入れない。

それ以外の声母では「肫」（照三）が見られるが、おそらく「肫」の誤刻であろう。

4・3 透 母

中古定母の「艇」1例が見られるが、これは現在ほとんどの方言で [t] 声母に発音され、『問奇一覽』のころにすでにそうであったことを示す例と思われる。そのほか「瞪」（澄母）が見られるが、これは『度曲須知』に見られない文字であり、なぜここにわざわざ混入されたのかは未詳である。

4・4 泥 母

泥母欄には『度曲須知』の孃母字が数例見られる。中古疑母字の「諺・臬」も混ずる。「諺」が [n] あるいは [ŋ] 声母に発音される現象はいまの南方の方言には見られる。また「突」（『度曲須知』では定母とされる。又音は透母）も見られるが、この字が泥母（あるいは「切韻捷法」に述べるような來母）と合流する方言はみあたらず、誤字あるいは誤入と思われる。中古來母字はまったく見られず、『問奇一覽』「切韻捷法」の記述に反して、泥と

來の両声母ははっきり区別されていたと考えられる。

5. 齒 音

5・1 禪 母

『問奇一覽』の記載どおり、日母字が多く見られ、28例に上る。孃母は1例見られる。日・孃母以外では中古牀三母字が4例（「繩・順・射（去・入）」）見られる。これらは『度曲須知』ではすべて牀母であり、『問奇一覽』編纂のさいに禪母に組み入れられたと想定される。この四字の声母は現在の北方方言では審母字と同音であるが、呉語のみ日母字と同声母となっている点、興味深い。定母の「膾」も見えるが、これは真文韻に収められることから推して、「盾」あるいは「楯」の誤字かもしれない。

5・2 審 母

中古審二母22例、審三母41例である。これ以外に「蕤」（日母）が収められるのは例外であるが、これは印字が少し不鮮明でもあり、あるいは別の字である可能性がある。

5・3 照 母

齒上音・正齒音・舌上音の全清音声母は同欄に収められる。照二母19例、照三母37例、知母18例である。他の声母字が混ざることとはなく、『問奇一覽』「切韻捷法」の記述どおりである。

5・4 穿 母

基本的には齒上音・正齒音・舌上音の次清音であり、穿二21例、穿三30例、徹母14例であるが、全濁音（「沖」「趨」（ともに澄母）の2例）が混在している。このほか「邁」（禪母）、「捶」（照三母）、「産」（審二母）、「纂」（精母）、「靺」（透母）が見られる。このうち「靺」は去声図に見られるが、これは入声字であり、やはり誤字あるいは誤入であろうと思われる。

5・5 牀 母

牀母欄に収められる文字は、中古音の牀二母12例、牀三母5例、澄母36例

があり、齒上音・正齒音・舌上音の全濁音声母を牀母で代表していると考えられる。例外的に禪母字5例（垂・臣・成・酬・蟾）が混ざる。この中古禪母の5例は現在、広州・廈門など一部の地方を除いてほとんどの地域で澄母字と同音化しており、『問奇一覽』のころにもそうであったことを窺わせる。

5・6 從 母

中古從母字以外に邪母17例が見られる。そのほか、牀_二2例（愁・驟）、牀_三1例（吮）が見えるが、「驟」は南方では「就」（從母）と同音となる。また、『集韻』に從母の音（才候切）もあり、こちらの音である可能性もある。北方諸方言では「愁」字音は從（あるいは邪）母と合流しないが、南方の方言には見られる現象である。

5・7 心 母

心母は比較的安定しているといえるが、「瘦」（審_二母）、「笈」（穿_二母）、「殉」（邪母）が混ざる。「瘦」は南方では心母字と合流している。また先にも述べたように『問奇一覽』では大抵の邪母字は從母に入れられ、「殉」（邪母）が見られるのは例外といえる。

5・8 精 母

尖団の区別ははっきりしており、見系声母が混ざることはない。他の声母では「疽・逵」（清母）、「沮」（從母）、「斬・縵」（照_二母）が見られる。このうち「逵」は『度曲須知』では清母であり、また現在ほとんどの地方において無声有気に読まれるため、なぜ『問奇一覽』で精母となっているのか理解に苦しむ。これ以外の文字は、現代漢語において無声無気音に発音される方言が報告されている。

5・9 清 母

中古清母以外では「啾・挫」（精母）、「産」（審_二母）、「傷」（牀_二母）、「愴・篷・嗩」（穿_二母）、「咤」（知母）、「魘」（曉母）が混ざる。このうち「愴」は『度曲須知』をみると「槍」となっており、おそらく誤刻であろう。

6. 唇 音

6・1 微 母

『問奇一覽』の記述どおり奉母16例が合併される。ただひとつ例外なのは「維」（喻四母）であるが、この文字が [v] 声母を有する方言は多く、とくに珍しいことではない。

6・2 敷 母

敷母以外に中古非母が21例見え、『問奇一覽』『切韻捷法』の記述どおりである。非母以外では唯一、奉母字の「俸」が見られるが、この字はいまの標準音では [f] 声母字である。

6・3 邦 母

「切韻捷法」の記述どおり並母が34例収められる。他に「頤」（滂母）、「不」（非母）も見えるが、「頤」は『集韻』に並母の音があり、あるいはこちらの音である可能性がある。

6・4 滂 母

滂母字以外に中古並母が6例見られる（蚌・髡・諱・殍・蔭・跽）。「蚌・蔭」は広州など一部の地域において無声有気に発音され、「殍・諱」もたいの方言において無声有気音であり、とくに問題はないようである。

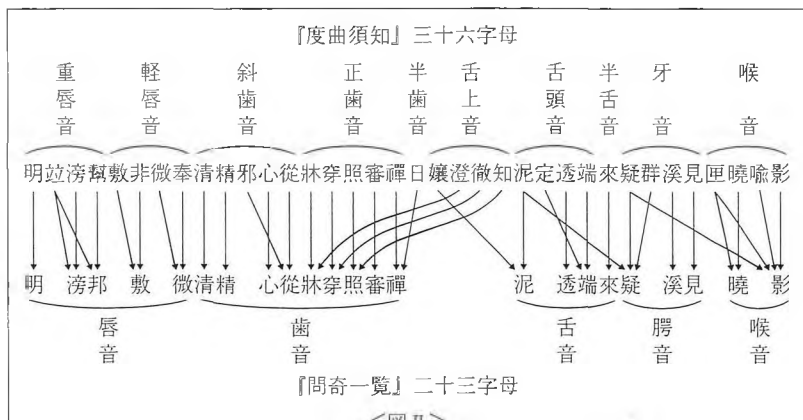
6・5 明 母

[m] と考えられ、他声母と混ざることはない。

7. ま と め

上における検討をふまえて『問奇一覽』の声母の実際の合併状況を図にあらわせば図Ⅱのようになる。三十六から二十三への声母の削減が、必ずしも『問奇一覽』『切韻捷法』で記述するような形で合併されているわけではないことは、図Ⅰと比較すれば明らかである。

個々の声母についてまとめると、まず喉音では、全濁音匣母は影母と曉母



の両方に混在しており、その扱いの一定しない点が看取される。腭音では palatalization は起きておらず、依然 /k/ であったと想定される。また中古全濁音羣母が『問奇一覽』『切韻捷法』の記述とは異なり、疑母欄へ合併されている点より判断して、濁音は保たれていた可能性がある。舌音では、定母字が一つの例外を除いて、『切韻捷法』の記述どおり、ほぼ端母に収められている。齒音についていえば、中古舌上音・齒上音・正齒音は合流し、照・穿・牀の字母によって代表される。また邪母が心母ではなく、從母に多く混入される点、清濁の対立を意識した結果であろうか。唇音では、微母と奉母は合併され、微母によって代表されたと考えられる。全濁音竝母は明母ではなく、大勢は邦母に入れられるが、一部滂母に入っている。

腭音全濁音の羣母のみ次濁音の疑母に合併され、唇音と舌音の全濁音（竝母・定母）が、それぞれ対応する全清音（邦母・端母）に組み入れられるという現象は、注目に値する。一部の南方方言において、無声無気系列の声母のうち幫・端母のみ濁化あるいは鼻音化する現象が見られ、平田1983/1984ではこの事実を考証し、吳方言祖語の幫・端母を入破音 [b] [d] と再構している。明末清初における南方音、とりわけ吳語の状況が明確ではない現今において、この再構音がどの時代まで適応しうるのかは別途考察されねばならない問題ではあるが、かりに『問奇一覽』にもあてはまるとすれば、濁音声母の竝・定母がそれぞれ幫・端に合併され、羣母のみ疑母に合流されることは、解釈に難くない現象であると思われるのである。

以上の検討を総括すれば、『問奇一覽』声母体系はおおまかには南方の音であるということができ、またところどころに呉方言の特徴が窺えるのである。これは、『問奇一覽』の著者が江都の人であることを考慮すれば、至当の結果であるといえる。この声母音系が明末清初の実際に存在した語音であるのか、それとも理論的な体系であるのかは、明確にしがたいことであり、今後、韻（声調）そして『度曲須知』『音韻須知』音系ともあわせてさらに緻密な分析を経ねばならない。明清の方言の状況が徐々に明らかになりつつある今日において、それらの音系はまた、近世音の解明に資するに足るものであると思われる。

〈注〉

- ① 『問奇一覽』は国会図書館所蔵の版本を用いた。
- ② 『度曲須知』は中華民國十一年上海商務印書館影印本を用いた。なお『度曲須知』と『問奇一覽』の関係については拙稿1996において詳論したので、ここでは重言を避ける。
- ③ 実質的には『広韻』に代表される音系をさす。なお、『広韻』未収の文字は『集韻』によって代用した。
- ④ 『問奇一覽』巻下五十一葉。ここの記述にみられる「邵子」に関しては、拙稿1996の中で言及したので、ご参照いただきたい。
- ⑤ 具体的な音価は依然不明であるが、現代漢語および『中原音韻』の音系などを参照し、便宜的な音を示すこととした。
- ⑥ 拙稿1995に詳しく述べたが、『音韻須知』反切は葉本反切を継承している。『音韻須知』音系と『問奇一覽』韻図音系とが具体的にどの程度一致するのかは詳細な検討を経る必要があるが、『問奇一覽』韻図の韻目は『音韻須知』韻目と合致しており、深く関わっていることが想定される。したがって『音韻須知』の反切もある程度のめやすになるものと思われる。なお、『音韻須知』の版本は京都大学所蔵のものを使用した。
- ⑦ 古屋1982p67参照。
- ⑧ 木津1989p14参照。
- ⑨ 《蘇州方言詞典》による。呉語では「横」は[h]声母に読まれることが多いが、個別的にたとえば「横単」「横話」などのときにはゼロ声母となる。
- ⑩ 《漢語方音字匯》による。
- ⑪ ちなみに「喫」字が『問奇一覽』去声図の東鐘韻曉母に収められるのは、韻母から見れば異例であるが、『度曲須知』の韻図でもおなじく去声の用韻曉母に収められている。
- ⑫ 『度曲須知』では平声の「強」は羣母であり、上声図には「強」字は見えない。

- ⑬ 『度曲須知』では「鮎」は孃母,「年」は泥母である。
- ⑭ 「二」は平・去の両図に見られるが,平声図に見られることは解せない。あるいは [lian] と読むのかもしれないが, そうであるならば支思韻に収められるのは理解しがたい。未詳。
- ⑮ 『度曲須知』では「鑿」字となっている。
- ⑯ 「娘・赧・釀」などが挙げられる。
- ⑰ 《漢語方音字匯》による。
- ⑱ 『度曲須知』では「盾」は牀母,「楯」は邪母である。

〈参考文献〉

- 趙元任《現代吳語の研究》清華学校研究院叢書第四種1928年
- 楊耐思《中原音韻音系》中国社会科学出版社1981年
- 北京大学中国語文学系語言学教研究室編《漢語方音字匯》(第二版)文字改革出版社1989年
- 李栄主編《蘇州方言詞典》江蘇教育出版社1993年
- 河野六郎「方音雜考」(『東洋研究所二十周年記念論集』大東文化大学東洋研究所1982年)
- 古屋昭弘『『度曲須知』にみえる明末の吳方言について』(『人文学報』No. 259東京都立大学1982年)
- 平田昌司「吳語幫端母古讀考(上)」(『均社論叢』14号1983年)
- 「吳語幫端母古讀考(下)」(『均社論叢』15号1984年)
- 木津祐子『『得泰船筆語』「いろは」注音漢字について』(『均社論叢』16号1989年)
- 浦山あゆみ『『音韻須知』音注における書きかえについて』(『集刊東洋学』74号中国文史哲研究会1995年)
- 『『問奇一覽』附切韻捷法考』(『中国語学』243号日本中国語学会1996年)
(大谷大学特別研修員)